

おそらく、僕だけ違うゲームをしている。

ジェフ

性別：男 種族：只人族

ドットワの商業ギルドの
ギルドマスター。
どこことなく胡散臭い雰囲気がある。
造形センスが非常に独特。

謎の黒山羊

性別：— 種族：—

トウノが突如巻き込まれた
レガシークエストで出会った
謎の黒山羊。
トウノの作った飴玉が大好物。

図書館の老女

性別：女 種族：—

『レディ・ブルーヤールの
図書館』で
トウノたちが出会った老女。
本の貸し出し手続きなどを
してくれる。

シャケ茶漬け

性別：男 種族：只人族

トウノの数少ないフレンドで、
バラムガチ勢。
アルスト内でも最前線組級の
実力を持つ
トッププレイヤーの一人。

鍋の蓋

性別：男 種族：巨人族

トウノの数少ないフレンドで、
「動物行者」という職業の
プレイヤー。
最近、連れている
従魔アルブが進化した。

あぬ丸

性別：女 種族：只人族

トウノの数少ないフレンドで、
「動物行者」という職業の
プレイヤー。
明るく快活な性格のコミュ強。

ようらん 揺籃の鍵

性別：— 種族：—

トウノの右手の人差し指に
ついている古ぼけた指輪。
たまに遺跡などに反応する。
バラムや黒山羊が
話しかけることも。



「いっておくが、図書館には
俺も一緒にいくからな」

「正直今は、イベントよりも
図書館をじっくり楽しみたいな」

遠野嗣治 (とおのつぐはる)

プレイヤー名：トウノ

性別：男 種族：只人族

超がつくほど読書中毒な青年。
『アルカストーリア
VRMMORPG『Arca Stora』では
「編纂士」の職業に就いている。
ひたすら読書をするため
冒険や戦闘を
一切しないプレイスタイルだが、
いつの間にか
クエストに巻き込まれている。

バラム

性別：男 種族：只人族

『鉄錆の大剣使い』で
名が知られる傭兵NPC。
ユナのワールドクエストを終えて
特Aにランクが上がったあとは、
トウノと一緒に行動している。

プロローグ

——この世界の図書館へいける。

僕は高鳴る胸の鼓動を感じながらこのVRMMORPG、『Arca Story』、通称アルストを始めた目的を思いだしていた。十歳のときから八年間、ある事情で意識はあるが身体をびくりとも動かすことができず、生命維持機能つきのVRベッドに横たわり仮想空間で生活していた。そんな僕のもっぱらの楽しみは読書で……

誰もが夢に見た『本物のような異世界』と謳^{うた}うこのゲームで、その異世界で生まれた本を読みまくる、それが読書中毒の気がある僕——遠野^{とのおの}嗣治^{つぐはる}がトウノとしてプレイを始めた目的だ。

そのせいか、プレイ初日には職業ギルドの資料室に丸二日飲まず食わずでこもって死にかけた。しかしそれがきつかけとなつて、ギルド指名依頼をこなすことになり、結果、プレイヤー、住民^{NPC}全体を巻き込むワールドクエスト、狂った魔物による大襲撃を発見してしまった。

そして僕が死にかけたときから妙に縁のあった住民であり、僕の身の丈ほどもある大剣を自在に操る腕利きの傭兵——大剣使いことバラムと出会った。

ギルドから依頼されたワールドクエストの追加調査の護衛としてバラムが同行することになり、

そこで起こったさまざまな想定外のイベントをとくに乗り越えていった。

そのなかで僕が《古ルートムンド語》という失われた言語を習得してユニーク装備を入手したことによって、《編纂》や《解析》などの一部技能がとんでもない性能になってしまった。

しかもその技能によってバラムを長年苦しめていた原因のようなものを取りのぞくことができ、そこで僕たちのあいだに絆のようなものが生まれたのか、バラムと盟友契約を結ぶことになった。

その「礼」としてキスや体温を交わし合うような接触をされ始めたのだが……バラムの指摘とおり僕は熱や人肌に弱いらしく、なんとなく受け入れてしまっている。

そしてその後、思いがけずぶつ飛んだ性能になってしまった技能でプレイヤーや住民の支援をし、さらには能力が大幅に向上した（解放された？）バラムによって無事、狂った魔物の大襲撃から町を守る事ができた。

そのさわぎが収束に向かったところで、ワールドクエストの報酬として職業ギルドのサブマスターであるギルから『レディ・ブルイヤーの図書館』の入館許可証がもたらされた。

『早くいきたい』と逸る僕の隣で、バラムが苦々しげにギルをにらんだ。

「……お前らも俺と似たようなことしてんじゃねえか。こいつのよろこびそうなものを伏せてここに留めやがって。なにが「年上からのアドバイス」だ」

「そんなこといいのかい？ ここにきみの分の入館許可証もあるんだけどね。というかきみのものを用意するのに時間がかかったんだよ？ そうかあ、これはいらなしかあ」

「さっさと寄越せ」

ギルがもうひとつ封書をだすと、バラムは目にも止まらぬ速さでぶん取った。

それにしても、意外だな。

「バ……大剣使いも図書館に興味があったのか」

「ああ？ ……お前、この資料室で自分がどうなったのか忘れたのか？」

「……」

バラムの言葉をきいて、職業ギルドの資料室で僕がどうなったのか、そして図書館にいったら自分がどうなるかまで考えて……目をそらした。

「どちらにしても、トウノくんにはストップパーが必要だからねえ」

「そういうことだ」

「……世話をかける」

ここまで自覚していても、いざ図書館にいつてバッドステータスをつけない自信がなかった。

「ちなみにこの封書は図書館以外で開封すると許可が取り消されてしまうから注意してね」

「わかった」

入れなくなっっては困るので、神妙にうなずいて封書をインベントリにしまう。

……そのとき、かすかに甘い香りが鼻腔をくすぐった。

「それじゃあ私の話はこれで終わりだけど、ほかになにかあるかい？」

「うーん……そうだ。ちょうど旧倉庫の本をひととおり読み終わったから、いったん鍵は返す」

「えっ。ああ、そうか。トウノくんはあそこにある本の言語を習得したんだっただねえ……」

ギルが遠い目をしている。

「それで、あその本を翻訳してみたんだが……」

「……一応、確認させてほしい」

昨夜バラムに渡したものと同じ翻訳本を《編纂》で生成してギルに手渡す。お叱りを受けたらこれは破棄して、《解析》ログは……消せないから自主的に封印しよう。

しばらくして翻訳本の確認を終えたギルは、眉間をもみながら深いため息をついた。

「……はあ、またとんでもない遺産をこんなに簡単に……。これも商業ギルドで手続きするときに見せるといいよ。もう——に丸投げしよう」

「うん？ わかった」

勝手に《解析》して翻訳したことには、とくにお咎めはなかった。よかった。

しかし最後のほうが、よくききとれなかった。

「ただし、これは個人ではあまり広めないようにしてほしいな。……まあ、ラストイくんに渡すくらいならいいけどね」

僕は曖昧にうなずいた。すでに《酒酔さけよひ》のいきおいでバラムに渡してしまっているのが、バレている気がする。ちなみに『ラストイ』とは、本名を隠しているバラムの通り名のひとつだ。ほかにも『大剣使い』や『鉄錆てつさび』と呼ばれている。

「それではこんなところで解散かな。ドウトワへはいつ向かってくれてもいいんだけど、そのときは守衛に伝えてくれ。そうしたらドウトワで商業ギルドがいいように取り計らってくれるよ」

「わかった」

そういつて僕は席を立った。ずっと重りのように肩にかかっていたバラムの手が外れていて、難なく立ち上がった。

「たまには元気な顔を見せてくれると私もうれしいし、カーラくんたちもよろこぶよ」

ギルからかけられた言葉と笑顔に、少しくすぐったさを感じながらうなずき、僕たちは執務室をあとにした。

ギルドカードの更新を終えて、裏口をとおって足早に宿のほうへ歩く。

——早く。図書館にいきたい。早く、本をたくさん読みたい。早く……

なんだか過剰に興奮している気がするが、抑えられず前のめりに歩いていると、不意に腕を引かれた。振り向くと、バラムが腕を掴んでいる。

「おい、少し落ち着け」

「そう、いわれても……早く、いきたくて……」

勝手に気持ち逸つてしまつて自制が利かない。おかしいな、さっきまではふつうだと思つてたんだが……

「……チッ。こつちだ」

そんな僕の様子を見るなり、バラムは舌打ちをして僕の腕を掴み、裏通りのさらに細く暗い路地に入った。あごを掴まれて顔をのぞき込まれる。

「落ち着かせてやるから、口あけろ」

「うん？ んむっ……」

いわれたとおりに口を少しあけると、すぐさまバラムの口におおわれた。なんの遠慮もなく僕の舌を捌め捕って吸ってくる。

静かな狭い路地に濡れた音が響く。……昨夜、バラムの部屋で交わした熱を生みだすようなものではなく、逆に熱を吸いあげてなだめるようで、変に力が入っていた身体が脱力するのを感じた。

「ん、はあ……」

「落ち着いたか？」

「……たぶん。なにがなんだかわからないが助かった」

思考がはつきりしてきてわかったが、さっきまで意識に霞がかかったような状態だった。

「向こうも呼んでやがんだよ、お前をな」

バラムが忌々しげに吐き捨てる。

「向こう？ ……図書館の『レディ・ブルイヤー』とやらが、ということか？」

僕の問いに、返事の代わりに鼻を鳴らした。

『レディ・ブルイヤー』も僕を呼んでいる——いつてみたら、どういふことかわかるだろうか？

第一章 商いの町『ドウトワ』へ

不思議な現象に首を傾げる僕の思考を中断させるように、大きな手が首筋をなでる。

「はっ！ 向こうは待たせられるだけ待たせときゃいい。どうせお前も長いほうの眠りとかいろいろあんだろ。ほかにこの町でやるとききたいことはないのか？」

「そうだな……うん……」

冷静になつてくると、屋外で密着しているのが気恥ずかしくなってきた視線を落とす。すると、首から下げた呼子笛が視界に入った。

「あ、そうだ。この呼子笛の製作者のところにいきたい」

「あん？ なんでだ？」

「きのう酒場で手に取ったラベイカの製作者が、この呼子笛の製作者と同じだったんだ。……確かこの町の職人だったような？」

もうずいぶん前のことのように思えるが、職業ギルドで町の情報を仕入れたときに、ラベイカと呼子笛の製作者である道具職人『ハイモ』の名前を目にしている。

「まあ、馴染みの店だから案内はできるが、なんの用だ？」

「ラベイカの製作者なら、似た楽器を知っていたり作れたりしないかと思って」

「……ああ、お前が弾いてたやつか。じゃあ今からいくか」

「いいのか？」

「いったろ。これからはずっとお前と行動するって」

そういうとバラムは僕の頬を軽くつねって、手を取った。

「こっちだ」

そのまま路地を抜け、『ハイモ』の店があるのだろうほうへ歩きます。

……自然に手を繋いで歩く感じになってしまった。少し落ち着かないが……人目はほとんどないし、いいか。

バラムに手を引かれて歩くことしばらく。そう時間をかけずに目的の店へ辿りついた。

裏通りのさらに奥まった場所にあり、一応看板らしきものがあるが、よく注意しないと見逃しそうだ。

看板には“ハイモの道具屋”とあった。

とてもシンプルな店名が、これまた素っ気なく木の板に彫られている。バラムは馴染みの店というだけあって、なんの躊躇^{ためら}いもなくドアをあけて店内へ入っていった。

「ジジイ、いるか？」

「あん？」

薄暗い店の奥から応答があったが、心なしか背が低い。しゃがれた声からして子ども、というわ

けではなさそうだ。

奥の人影がこちらを振り返った。背が低く、全体的に筋肉が盛り上がっていて顔まわりの毛量がとても多い。ヒゲ面で年をそれなりに重ねていそうだ。小人族^{こびと}のコノルを知っているからわかるが、彼の種族こそがドワーフなのだろう。

不機嫌そうな鋭い眼光だったが、バラムの姿をみると雰囲気はやわらかくなった。

「なんだ、鉄錆の坊主か。このあいだはずいぶんと活躍だったそうじゃねえ、か……っておい、デー
トならほかをあたれよ」

「デ……」

思わぬ言葉に反射的に彼の視線を追うと、僕とバラムの手は繋がれたままだった。

……これはさすがに恥ずかしい。あわてて手を離そうとするが、バラムがガッチリ掴んでいて離せなかった。

「はっ、関係ねえだろ」

「ああ？ 口の利き方が……ってお前え、なんか雰囲気変わったか？」

「かもな」

「ふうん？ で、今日はなんの用だ？ 冷やかしたたら叩きだすぞ」

バラムと彼……おそらくハイモはかなり気安い関係なのか、すっかり僕は蚊帳^かの外だった。しかし、用があるのは僕なので話を切りだす。

「用があるのは僕だ。酒場にあったラベイカの製作者に相談したいことがあったきた」

「酒場のラベイカ？ ああ、あの弦楽器か。ありや確かに俺が作ったもんだが……もしかしてお前え、きのう酒場でラベイカを弾いてた兄ちゃんか？」

「ああ、たぶん僕だと思っ」

それを知っているということは、きのうのあの酒場にハイモもいたのだろうか？

「おお！ するつてえと、兄ちゃんがこの町の救世主か！ そういうことは先に教えるよ坊主！」

「知るかよ」

「立ち話もなんだ、相談とやらをきいてやるから、奥へ入んな」

一氣に上機嫌になったハイモに案内されるままに店の奥へ入っていく。

……バラム、そろそろ手を離してもらってもいいだろうか。

店の奥は作業場といった感じで、広く大きなテーブルを中心に、いろいろな道具や作りかけと思われる木材などが置かれていた。

壁には大小さまざまな楽器がぶら下がっていて、ぱつと見た感じ、ヴァイオリンはなさそうだった。「こんなところですまねえが、適当に座ってくれ」

うながされるまま、ハイモお手製と思われる椅子のひとつに腰掛ける。バラムは近くの壁に寄りかかり、座る様子はない。

「そーいやまだ名乗ってなかったな。まあ、看板を見りゃわかるが、俺はハイモ。しがない木工職人だ」

「僕はトウノという。異人^{マシト}で、半人前の編纂士^{ようちん}だ」

『搖籃編纂士』といってもなんのことかわからないと思うので、半人前と名乗ってお茶をにごした。

「ガッハッハ！ 半人前がこの町の救世主たあ、今後が楽しみつてもんだな！」

この前のワールドクエストで【ユヌの救世主】の称号を得たが、そう呼ばれるのはとても落ち着かない。

「その、できればトウノと呼んでほしい……」

「おう、トウノだな。俺のこともハイモでいいぜ。んで、相談つてのは？」

あまりからかう気はないようで、ハイモはすぐに呼び方をあらため本題に入った。

「実はあのラベイカに似た楽器を探しているんだ。ヴァイオリンか、フィドルという楽器はこの世界にあるだろうか？」

「バイリ……ヒドル……？ 少なくとも俺はきいたことねえなあ」

「そうか……」

ハイモが発音にすら苦心している様子を見ると、本当に知らないみたいだ。

ということとは、この世界には存在しないのだろうか？

「そもそも、楽器作りはほぼ趣味みたいなもんなんだけだよ。でもまあ最近マンネリしてたんだ、どんな楽器なのかちよいと教えてみな」

豊かなヒゲをなでつけながら、ハイモがいう。

僕はネットで検索した内容を見ながら、なんとかハイモにヴァイオリンという楽器のことを伝え

てみた。

ところが、実物を見たことがない相手にそれを伝えるというのは、想像以上にむずかしかった。どうか見た目の情報を伝えようと手帳にヴァイオリンの絵を描いてみるが、惨憺^{さんたん}たる出来栄えだった。

……くつ、昔から運動と絵はダメなんだ……

「うーん、実物を知らねえからなんともいえねえが……要は弦が四本でラベイカより大きく括^くれを作って、木をくり抜くんじゃなく面を作って繋ぎ合わせるんだろ……」

ハイモは唸^{うな}りながら、僕の手帳にイメージ図を描き込んでいく。そこには僕が実物の写真を見ながら描いたものよりもはるかにヴァイオリンに近い図案があった。

「すごい……大体そんな感じだ」

「おう！ なんかこう、ピーンとくるものがあつてな！ あとはアレだ、もう一度ラベイカを弾いてるところを見せてくれねえか？」

「弾いているところを？」

ヴァイオリン製作と僕のラベイカ演奏になんの関連があるんだろう、と首をひねる。

「きのう、肩で支える変な弾き方をしてたが、この楽器はむしろその弾き方に特化してんだろ？それでラベイカからどう発展させるべきか、雰囲気が掴めるかもしれない」

「わかった、弾いてみよう」

ハイモが壁にぶら下げられた数々の楽器の中からラベイカを差しだしてきたのを受けとり、肩で

支えるようにして構える。曲は……酒場で弾いたやつでいいか。

アルストのオープニング曲はなにが起るかわからないし。

どれだけ弾けばいいか指定がなかったので、たいして長くない旋律を五周ほど弾いて止める。

「うーむ……よし。このイメージでちよつくら試作してみよう」

「本当か！」

「おうよ！ 久々に職人魂^{うず}が疼^{うず}いてるから、期待して待つてな！」

ハイモは腕を組んでニツカリと笑った。頼もしい。しかし、あることを思いだした。

「あ、でも僕たちは、これからしばらくこの町を離れるんだが……」

「そうなのか？ まあ、一発じゃ決まらねえだろうし、こっちに戻ったときにでも寄ってくれりやあいぜ」

「わかった、そうしよう」

この世界にはヴァイオリンそのものはなかったが、ハイモのおかげで手に入れられそう。まあ、あればいいくらいだったし、こちらのほうがなんだかワクワクしている。

「そうだ、依頼料はどのくらいだろうか？ この依頼チケットで足りなければ追加で払う」

「あん？ 趣味だし、作れるかもわからねえから後払いでもいいが……そんじやあこの銀のほうを担保としてもらおうか。いいものができたらギルドや魔楽器工房からたんまりもらおうからよ」

「魔楽器工房？」

きき慣れない名前だ。

「あーっと、魔法を扱う両手杖に楽器型のものがあるのは知ってるか？」

僕は「ああ」とうなずく。

「あれはただの楽器を、特殊な技能で両手杖として扱えるようにしてるんだ」

「そうなのか。それは知らなかった」

「俺は魔楽器工房にいくつか楽器を卸してるんだが……最近は性能をあげるのに苦戦してるようだな、新しい楽器を見せつけて発破はつぱをかけてやらあ」

そういつてハイモは豪快に笑った。

……『魔楽器工房』か。いつか訪れてみたいな。

「そういや、お前さんが首から下げてるそれは、ここで買ったもんか？」

ふと、ハイモがフサフサの眉毛をぐいっとあげて、僕の首元を凝視ぎょうしする。

「ん？ ああ、そうだ。バ……その大剣使いからもらった」

「ほーん？ そういや前に買っていたときに今さらなにに使うんだと思ったが……ふーん、ほーん？ あの坊主がなあ……」

「うるせえな」

ハイモはニヤニヤしながらバラムを見る。バラムはあからさまに不機嫌な顔だが、なんだろう、照れもありそうだ。

バラムはハイモを気の置けない相手だと思っている……気がする。

「用が済んだならもうでるぞ」

きまりが悪い空気を断ち切るようにバラムがぶっきらぼうにいう。

「あ、ちよい待ち。これ持っていきな」

するとハイモが、僕にラベイカを差し出した。

「いいのか？ 値段は……」

「やるついでだったんだ。そうだな……この町を守ってくれた礼つてところだ」

ハイモの瞳からは先ほどまでのからかいの色が消え、真剣な光が宿っていた。

……これも【ユヌの救世主】称号の効果だろうか。これ以上遠慮したらハイモが困る、か。

「そういうことなら、ありがたく。じゃあまたくる」

「おう、期待してな！」

ラベイカを受けとり、インベントリにしまう。とりあえず相談ごとはまとまったし、あまり長居してもなんなので道具屋をあとにした。

思いつきの用事はこれで終わり、あとすることといえばフィールドにでるための準備だろうか。しかし、消耗品はワールドクエストの報酬で過剰にもらっているしな……

そうだ、使わなそうなのはバラムに渡してしまおう。

「バラム」

「なんだ」

「この前の防衛戦で、えーと……異人限定の報酬があつたんだが、僕が持っても仕方ないもの

が多くてな。これ、バラムが活用してくれ」

「あん？ ……いや、だからいきなり渡すな！」

一番グレードの低い消耗品以外のほとんどを、インベントリからだしてバラムに渡す。

「……ライフポーションとスタミナポーションは使うが、マジックポーションはいらんし、このチケツト？ とかいうやつもいらん。なにかに使えるかもしれないからお前が持つとけ」

しかし結局半分くらい返却されてしまった。「結晶はお前が使うべきだ」とステータスアップの結晶も返却されている。バラムにもあまり噛み合った報酬ではなかったようだ。

「……なあ、防衛戦のときに寄越してきた飴玉って、また作れるのか？」

「ん？ ああ、ライフポーションと携帯食料……じゃなくてもなにか固形の食べものがあれば、いくらでも作れると思う。攻撃力アップはそれだけではつけれないが」

「ふうん。あの手紙にあった内容を見るかぎり、攻撃力は食いものじゃなくてもいいんだよね？」

「そうだな」

僕はうなずいた。ワールドクエストのとき、前線にいるバラムへの陣中見舞いをつくるために、初期装備のナイフを《解析》して《編纂》したら攻撃力の移動ができておどろいたものだ。

「攻撃力上昇はなくてもいいから、いくつか作ってくれねえか」

「飴玉を？」

「ああ」

まあ、それなら材料も大量にあるし今すぐにでも作れるが、攻撃力上昇がないならたいしたもの

ではないのでは……もしかして味が気に入ったんだろうか？ 一個試しに舐めてみたら、りんご風味の砂糖飴という感じで結構甘ったるかっただが……

「甘いものが好きなのか？」

「……そんなところだ」

結構、返事までに間があったな。あまり知られたくない嗜好^{しこう}なのだろうか。

そういうことならと、さくつとインベントリから直接飴玉を作ることにした。

「強壯の飴玉」

揺籃編纂士トウノの《編纂》によって生みだされた飴玉。使用すると一定時間体力とスタミナが回復し続け、聖属性が少し上昇する。

状態…良 品質…C 分類…食品

効果…満腹度+30%、一定時間体力回復(小)、一定時間スタミナ回復(小)、一定時間聖属性

威力上昇(小)

素材…ライフポーション、携帯食料

製作技能…《編纂》 製作者…トウノ

「ほう、攻撃力を無理やりつけなければ、デメリットも付与^{くわ}されないみたいだ」

飴玉を渡しつつ、前回の飴玉との相違点をバラムに伝える。

「切り札としてはアレも欲しい。攻撃力のほうはなにか見繕ってくるから作ってくれるか？」
「ああ、いつでも」

「あとポーシオンと食いものも俺が用意するから、定期的にこの飴玉が欲しい」

「それとかまわれないが……」

そんなに甘いものが好きなのか。バラムの運動量的に太る心配はなさそうだが……

「この世界って、虫歯とかあるのか？」

「……あ？」

結論からいうと、虫歯は一応あるらしい。よほどのことがないとならないみたいだが、システム的にはバッドステータス《病気》の軽度なものにあたるようだ。グレードの低い治癒ポーシオンか《回復魔法》の《キユア》で簡単に治せるらしい。便利だな。

それはさておき。

「このあとはどうしようか？」

「宿まで送るから、お前はそこで準備して待ってる。俺はほかの消耗品を調達してくる」

「……僕もいつてみたいんだが」

「店が大通りにしかないからダメだ」

「なんでダメなんだ？」

本来、僕みたいな異人は大通りで活動するのが主流だ。なんの問題があるのだろうか。それにこ

れからユヌをでることだし、これまでいったことのない場所にいつてみたい。

「……いいだろう。ただし、そのあいだこうしてるなら、な」

「えっ」

そういうや否や、バラムに手を握られた。……ここにくるまでのように手を繋いでいるなら、というこたらしい。……ううん、気恥ずかしいが、それでユヌをまわれるならいいだろうか？ プレイヤーたちは今はほとんどつぎの町にいつてしまったというし……

「わかった。これでいこう」

そして、バラムに手を引かれて久しぶりの大通りへ繰り出したのだった。



ユヌにいるプレイヤーが少なくなっているというのは本当のようで、大通りには人がまばらだった。ちらほら見覚えのある初期装備の者がいる程度だ。

「異人でごった返した大通りしか見たことないから、なんだか新鮮だな」

「前はこれよりも閑散かんさんとしてるのがふつうだったがな」

「それはそうだろうな」

大きさの割には住民の数が少ないように思えるこの町に、ある日突然何万人もの人が増えた。……よく考えたら住民はこれらの事象についてどう思っているのだろうか。

折を見てきいてみよう、などと考えているうちにバラムの足が止まった。

「ここでポーションを買う」

「ほう」

看板とミニマップによると『雑貨屋』とだけ書いてあった。店内に入ると、カウンターがあるだけの小ぢんまりとした内装だった。商品などは陳列されていない。カウンターには店主と思われるお婆さんがなにをするでもなく静かに座っていた。

「いつものと治癒ポーションをいくつか」

「あいよ」

お婆さんがチラッとこちらを目を向け、わずかなあいだ目が合う。が、すぐに奥へ引っ込んでいてしまった。

「ほらよ」

しばらくしてお婆さんがカウンターにどっさりとアイテムを置いた。

「……おい、多いぞ」

「感謝の気持ちだよ。別にアンタにじゃないよ」

「そうかよ。あとで返せっつっても返さねえぞ」

「ピーチクパーチクうるさいねえ、用が済んだんならさっさといきな」

バラムもチラッとこちらを見る。……なんだろうか。

こうして消耗品を準備よく入手できた。ちなみにこは、ふつうのプレイヤーは利用できない

たいだ。

店をでながら、ふと思ったことをつぶやく。

「もつと商品が店内に置いてあるのかと思ってたが、そんなこともないんだな」

「市場じゃあるまいし。盗んでくれていつてるようなもんだろ」

「なるほど」

なんともリアルな理由だ。逆にウィンドウショッピング的なことをしたければ、市場にいけというのか。

つぎは武具屋だ。ここはプレイヤーも利用できる店で、武器や防具の調達ができる。

店内に入ると武器や防具が数多く立てかけてあって、ファンタジーものの『武具屋』のイメージどおりだ。店内はそれなりに広く、プレイヤーが何人かいても余裕がある。

……なんだか視線を感じるな……と思っていると。

「っ！ 兄貴!？」

突然、大きな声がきこえた。

おどろいてそちらを見ると、背中に長剣を背負い、質のよさそうな革鎧を装備したプレイヤーが目を丸くしてこちらを見ていた。初期装備がひとつもないことから、それなりの日数プレイしているのだとわかる。暗めの赤髪を無造作に結い、瞳の色はサーモンピンクの派手さはないが整った容姿の只人族ただひとの男性のようだ。

そのプレイヤーはバラムを見てから僕を見て、繋がれた手を見ると「やはり……」とつぶやいて目を閉じてしまった。……まあ、なんともいえない場面だろうが、上手いことスルーしてもらいたい。少しして、彼は意を決したように一歩こちらに進みでた。

「兄貴……決してデートのお邪魔をしようってんじゃないんですが、少しだけお話が……」
「デートでは……」

「ああ？」

また「デート」といわれたことに困惑する僕の声をさえぎるように、眉間にシワを寄せたバラムが威嚇いばのような声をあげた。ふたりはにらみ合いになり、沈黙が落ちる。

しばらくして、ふたりはバラムがあごで指した店のすみへ移動し、なにやら話し込みはじめてしまった。

少し経って話がまとまったのか、プレイヤーがこちらにやってきて――

「トウノくん！ いや、トウノさん！ 俺とフレンドになってください！」

僕の足元に流れるような所作で土下座をしてそう叫んだ。

〈『シャケ茶漬け』さんからフレンド申請が届きました〉

惚れ惚れするような、なんのためらいもない土下座にしばし呆然としてしまったが、我に返るとまわりの視線が痛い。とりあえず、土下座はやめてもらわなければ。

「ああ、別にかまわないから、とりあえず立ってくれ」

「兄貴との交流の邪魔もしないし、むしろ邪魔する奴を排除するから……え、いいの？」

『シャケ茶漬け』というらしいプレイヤーは、僕の了承をきいていなかったのか、最後のあたりでようやくボカンとこちらを見た。……ちらりと不穏な言葉がきこえた気がするが……まあ、いいか。
「ああ。だからその……早く立ってほしい」

〈フレンド申請を承認しました。『シャケ茶漬け』さんとフレンドになりました〉

視線操作ですばやく申請を承認する。

「お、わ、ありがとう！ 自分でいうのもなんだけど、突然フレンド申請してくる奴をこんなあっさり承認していいの？」

「うん？ なんだ？」

やっと土下座から立ち上がったシャケ茶漬けがいわんとするところがわからなくて首を傾げる。

「だってトウノくん、ワールドクエストで総合貢献度一位だったし、ほかにいろいろと発見して注目を集めてるだろ？ ふつう、警戒するんじゃないか？」

「正直、ほかのプレイヤーとあまり顔を合わさないからほとんど実感はないんだが……まあ、迷惑だったらブロックなり通報なりして終わりだ」

「あー……それもそうか！」

シャケ茶漬けは納得という風にうなずいた。

「それに大剣使いがある程度認めてそうだから、問題ないかな、と」

防衛戦の配信を見てもプレイヤーとあまり関わってなさそうだったバラムが、シャケ茶漬けのこととはちゃんと認識していたし。なぜ「兄貴」と呼ばれているのかはよくわからないが。

するとシヤケ茶漬は神妙そうに目を閉じて天を仰いだ。

「……すうーっ……ありがてえ。二重の意味で」

「二重？」

「いやっ、こっちの話だ」

「おい、もう用は済んだか」

「うっす！ 無事フレンドになつてもらいました！」

バラムが低く唸るように声をかけると、シヤケ茶漬は背筋をピンとまっすぐにして応えた。なんか……ふたりを見ていると昔の不良ドラマとか漫画とかを思いだすな……

「そうか……少しのあいだこいつのを見てろ」

「うっす！ いつまでも！」

「あ？」

「こっ、言葉の綾あやっす！」

バラムは冷や汗を流すシヤケ茶漬けに舌打ちをすると、店の奥おくにいつて店主とやり取りを始めた。「そういえば兄貴とトウノくんは、変わったところをデートコースにしてるんだな？」

「デ……じゃなくて、ドウトワにいく準備をしてるだけだ」

「まだドウトワにいつてなかったのか……」

心底おどろいたという顔をされた。ということは、ある程度プレイしている者たちはもうほとんどドウトワに進出しているのだろう。

「ドウトワどころか、この武器屋に入ったのも初めてだしな。……あと呼び捨てでいい」

「マジか。そんなんでどうやってプレイできるんだつて思うけど……トウノくんだしなあ……。あ、

呼び捨ては兄貴に殺されそうだから勘弁してくれ」

「そんなことはないと思うが……まあ好きに呼んでくれ。ところで、なんで大剣使いを『兄貴』と呼んでいるんだ？」

呼び捨てかどうかはそこまでこだわりはなかったので、一番の疑問をきいてみることにした。

「それは俺が思い浮かべる『カッコいい』詰め合わせハッピーセットすぎて、心を撃ち抜かれたからだな！ 懂うれ的な意味で！」

急に話すスピードがあがった気がする。でもそうか、シヤケ茶漬はバラムに懂うれているのか……「じゃあ、ドウトワまでパーティを組むか？」

見た目的にシヤケ茶漬は戦闘職だろうし、口振りからドウトワまでいける実力があるみたいだから、バラムの負担が軽くなるかもしれない。

そんな意図で提案した瞬間——ビシッと空気が凍りついた、気がした。

「うん？」

「ハ、ハハハ……冗談はよすんだ、トウノくん。俺が兄貴に無限リスシルされちまうよ……それにそんな野暮な真似は俺もしたくないし！」

青ざめた顔で断られてしまった。ちなみに『リスシル』とは『リスポーンシル』の略で復活ポイントで待ち伏せされて復活直後に倒されることをいうらしい。

武具屋での用を済ませたバラムが戻ってきたところで、三人目のフレンド、シャケ茶漬けと別れた。
「調達はひととおり終わった。……ほかにいきたいところはあんのか？」

「そうしたら最後に東門前の広場が見たい」

「おもしろいものなんてないぞ」

「屋台があるときいているし、異人が転移できる像、『アークトウリアの像』も直接見てみたい」
今を逃したらつぎにいつ見られるかわからないし。

「じゃあ……軽く食ってくか。いくぞ」

「……ああ」

バラムはそういうと、ふたたび僕の手を取って歩きだした。「この大通りをまっすぐ進むだけだから、手を引く必要はない」とは、なんとなくいえなかった。

大通りを東方向へ進むと、すぐに広場が見えてきた。とくに目立ったものはなく、門から半円形にスペースが空いているだけで、屋台もふたつほどしかない。

「本当に屋台以外なものもないな」

「だからいったら」

「アークトウリアの像は……」

「あれだ」

バラムが指すほうを見ると、広場と大通りのちょうど境目あたりに大きな石があった。設置され

ている場所も道祖神みたいだな、と思いつながら近づくと、石に人型の像が彫られているのがわかる。ワールドクエストの配信で見たとおりの見た目だ。美形の神なのかどうか判断がつかないほどぼんやりとした像ではあるが。

確か、機能を使うにはこの像に触れるんだったな……と手を伸ばすと――

バチッ、と静電気が走るような感覚とともに弾かれてしまった。

《特殊効果《夜^よ狗の目印》《鉄の匂い》《錆^{さび}の匂い》《灰の残り香》》がついているため、機能を使用できません。使用するにはこれらの特殊効果を解除してください

「……はい？」

まったく予想外の出来事と通知にフリーズしてしまう。バラムがあわてた様子で、僕の弾かれた腕を取った。

「っおい、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だが……」

今この像の機能が使えないのはわかった。使うには特殊効果の解除が必要なもの。

問題は……《灰の残り香》以外身に覚えがないことだ。名前に出どころは想像がつくが。しかも順番的にゾーイの特殊効果よりも前からついていたようだ。

なぜ今まで気づけなかったかと思いを巡らせ、通常のステータス画面には『特殊効果』の項目がないからだと思いつた。もしかしたら特殊効果は《解析》をしないとわからないのかもしれない。……そういえば、僕自身を《解析》したことはなかったな。ちょっと確認するのがこわいが、宿

に戻ったら自分を《解析》してみよう。

そう決心したところで、肩を掴まれて引き寄せられた。

「おい、本当に大丈夫か」

「あ、ああ。いろいろ確認していた。どうやら僕についている特殊効果を解除しないかぎり、この像の機能は使えないようだ」

「ふん……やはりな」

「やはり？」

鼻を鳴らしたバラムがアークトゥリアの像に手を伸ばす。すると——バチツと弾かれた。

……まあ、像にお断りされた特殊効果のほとんどはバラム由来だろうから……それをつけた本人がお断りされないわけではないということか。

「外にある『欠け月の写し』とやらは使えると思うがな」

「なるほど」

『欠け月の写し』は、アークトゥリアの像と同じくワールドクエストクリア後に解放された、フィールドに点在するチェックポイントだ。アークトゥリアの像は町などの安全地帯にあるが、欠け月の写しは町には存在しないという違いがある。このふたつに触れた場所が転移ポイントとして追加され、転移機能によって瞬間移動ができる。この世界を効率的に冒険するには必要不可欠な機能だ。

基本的にはプレイヤーにしか使えない機能だが、プレイヤーと盟友契約を交わした住民は使えるようになる。つまりバラムは使える、はずなんだが……

バラムは属性的(?)に光神とだいぶそりが合わないようなので、アークトゥリアの像は使えず、欠け月の写しは使えるのだろう。これは予測では闇に関する神に繋がるもののようなだから。

そしてそれは、バラムとゾーイの特殊効果を持っている僕も。

……この像を今《解析》するのはやめたほうがいいかもしれない……まあ、機能はわかっているんだし、今すぐする必要はないだろう。

「……この像、使いてえか？」

「うん？ いや別に……そこまで移動効率は重視してないし、欠け月の写しが使えるなら目的の町近くにある欠け月の写しに転移して、そこから町に向かえばいいだろう？」

効率的なプレイなんて考えていたらこんなことになっていない。アークトゥリアの像にはもうひとつ、〈追憶の戦い〉という倒されたボスエネミーと再戦できる機能があるが、これはお断りされてなくても使わなかっただろう。使えなくて困ることは……意外とない。

「……そうか。んじゃ、屋台でなにか買って食うか」

「そうだな」

ここで確認できることは大体済んだので、僕たちは屋台でラビット肉の串焼きを買って食べながら宿へ戻った。

買い食いするのもずいぶん久しぶり……というか一、二回しかしたことないな……

宿に戻ると、ちょうどローザと旦那さんがそろっていたので、準備が出来次第ドウトワに行くこ

とを伝えた。

「そうかい……じゃあ、しばらく会えなくなるんだねえ」

しみりとした様子でローザがいう。その顔を見て、僕もこの宿やローザたちとしばらく会えなくなるのかという実感が湧いてしまった。

「アタシったらやだねえ、今生こせいの別れじゃあるまいし！　また弁当を持たせてあげるから、そんな顔しないでくれ」

ローザが力強く背中を叩く。いつか遺跡前の関所で傭兵に叩かれたときのような痛みは感じず、沈んだ気分が吹き飛ぶような感覚があるだけだった。

「……ああ。また戻ってきたら、ここに泊まってもいいだろうか」

「なにいつてんだい！　いいに決まってるさ！」

ローザはそういつて、ニツと満面の笑みを浮かべた。

「ふ……ここのご飯が恋しすぎて、すぐに戻りたくなってしまうかもしれない」

「おやまあ！　うまいこというようになったじゃないか！」

冗談めかしたが、割と本心だ。偶然でしかなかったが、八年ぶりといつていい食事がこのあたかなご飯で本当によかったと思えるくらいには気に入っている。

「といつても、起きていられる時間を調節するために、いつもより早めに長く寝るつもりだから、まだもう少し泊まるんだが」

と、同行するバラムに伝えるつもりで横目で見ると、

「どのくらいだ」

「三日くらいかな」

「……そうか。三日後、お前が起きたらすぐ出発でいいんだな？」

バラムの確認にうなずく。

「すぐつたつて、うちで朝ごはん食べてくんだろう？」

「もちろん」

しばらく食べられないのだから、食べていけない手はない。

「弁当も準備しとくからねえ。アンタ！　腕によりをかけるよお！」

ローザに発破をかけられた旦那さんは静かにうなずき、力こぶを作った。

その後、食堂で食事をとつてから、二階へあがった。

僕が自分の部屋に入ると……扉の前でバラムがすごい見えてくる。なんだろう……ああ。

「どうぞ、入ってくれ。もしかして、部屋の主の許可がないと入れないのか」

そうたずねると、バラムは「ああ」と答えながら部屋へ入ってきた。

鍵などなくても『そういうもの』かと思っていたが、案外ファンタジーなセキュリティがしっかりしていたようだ。

「なんだこれ」

バラムが机に置かれていた木彫りの像を手にとった。

「バラムたちが遺跡で戦った狂った魔物をかたどったものらしい。……あの魔物からの返礼だとか」「ああ？」

手にした像を強く握ったのか、ミシツと音がした。

「置物以外に特別な用途も効果もなさそうだから、問題ないだろう……たぶん」

「『たぶん』かよ」

だって《解析》結果の隠蔽があまりに多かったし……。僕が目をそらしていると、盛大なため息がきこえた。

「まあ今はいいだろう。それより……」

「わっ」

バラムは置物を元の位置へ戻すと僕の腕を掴んで引き、ベッドに座った彼の膝に僕を座らせた。

「三日会えなくなるんだ。防衛戦で借りも増えたし、しっかり礼をしておかねえとな」

「……それまだい、むっ」

さすがにキスを正当化するための詭弁なんじゃないかと思いついてるのだが、僕相手にそれをする意味がわからないのと、なぜか抵抗する気が湧かないので受け入れてしまう。

昨夜のような熱が渦巻く感じはなかったが、じわじわ熱を滞留させるようなゆっくりと長い口づけをした。

その後、ある程度満足したらしいバラムに頼まれて飴玉を追加で作って渡し、僕自身を《解析》してからログアウトした。



しばらく休憩したあとアルスト公式連携アプリをひらき、先ほど「トウノ」を《解析》した結果のスクショを表示した（《灰の残り香》はすでに《解析》済みなので割愛する）。

名前…トウノ 状態…正常 特殊効果…《夜狗の目印》《鉄の匂い》《錆の匂い》《灰の残り香》
年齢…18 性別…男 種族…只人族 職業…揺籃編纂士 職業ギルドランクC
称号…【本の虫】【森碧】 控え【揺籃】【ユヌの救世主】
技能…《解析》《編纂》《古ルートムンド語》《歴史学》《暗視》《感知》《騎乗》《演奏》
装備…揺籃の編纂士装束シリーズ、揺籃の鍵、革紐付きの呼子笛、盟友の証《バラム》

《夜狗の目印》

【夜狗の血族】バラムのつけた目印。己の縄張りを示す証。

特殊効果…縄張りを侵す者への《夜狗の威圧》自動発動

《鉄の匂い》

【鉄錆】バラムの宿す力の匂い。鉄を厭う者たちは嫌悪するだろう。

その者たちには汚れであるゆえに。

特殊効果…特定の住民の好感度変化（中）、転生選択肢分岐

《錆の匂い》

【鉄錆】バラムにこびりついた妄執の匂い。錆を厭う者たちは嫌悪するだろう。その者たちには汚れであるゆえに。

特殊効果…特定の住民の好感度変化（中）、転生選択肢分岐

……内容やいどうやって付与されたのかはもうこの際置いておくとして……

『転生選択肢分岐』ってなんだ？

攻略サイトで検索してみても、『転生』が記載されたページは見つからなかった。

ただまあ、メタ的な推測はある程度できる。ほかのゲームやラノベでの設定を調べてみると、考えられるものがふたつあった。

ひとつは、転生することで今まで積み重ねたステータスがリセットされるが、ステータスの限界値や成長率が増幅するパターン。ビルドの組み直しができることもあるようだ。

もうひとつは、魔物でいう『進化』のように種族が変化し、その種族に合わせてステータスやスキル、魔法などの能力、姿などが変化するパターンだ。

“選択肢分岐”とあることから、後者を指しているような気がする。もしくはこのふたつの候補の合わせ技ということもあるかもしれない。

「……まあ、今考えても仕方ないし……そのときに望むプレイができそうな選択をすればいいか」

ほかのプレイヤーが転生を見つけて、検証結果がある程度出そろってから考えるのもいいだろう。

自分のステータスの確認が一段落したところで、見計らったように現実世界から着信が入った。

〈応答〉コマンドを選ぶと宙にウィンドウが出現し、分厚いメガネをかけ、ボサボサの黒髪に白いものがちらほら混ざった中年の男性が表示された。

僕の叔父さんだ。

「やあ、嗣治！ すっかりゲームを楽しんでいるみたいだね！ ハマっちゃったかー？」

「まあ……」

確かに、ゲームを開始してから、連続ログイン制限解消時間と睡眠時間以外のほとんどをアルストプレイに費やすほどには『ハマって』いる。

「いやあ、まさか読書にしか興味がなかった嗣治が、廃人並みにプレイするなんてなあ！」

そこまでではない、と思いつつ、なにもいい返せなかった。

「その話はいいから……バイトの依頼なら早く送ってよ」

「ありゃ、お見通しかー。ちよっと研究資料を清書する時間がなくて、締切も迫っててな……バイト代は弾むからよろしく！」

「はいはい」

直後、その研究資料とやらのデータが届いた。相変わらず内容は専門用語が多すぎてよくわから

ないが、清書したり出典をまとめて記載したりすればいいだけだ。何年か前からお小遣い稼ぎのアルバイトとしてときどき作業をしているので、慣れたものである。

……バイトは結構久しぶりのはずだが、頼まれた作業自体はあまり久しぶりに感じないな……

「今日できるところまでいいからー！ 落ち着いたらまたそっちで会おう、じゃあな！」

「わかった。叔父さんも仕事はほどほどに」

「うっ……善処しよう！」

叔父さんがあからさまに目をそらしたところで、通話が終了する。

さて、さっさとバイトを始めよう。ここではアルストと違って、いくら集中しようが満腹度を考えなくていいし、睡眠も強制的にとらされるので、比較的自由だ。

さくっとバイトを終わらせて、余った時間はドウトワ前のボス戦を調べたり、こっちの本を読んだりしよう。



宿屋のベッドで目を覚ます。この慣れてきた光景とも今日でしばしのお別れだ。

机に飾っていた木彫りの置物をインベントリにしまい、ムートンのマントを取りだして装備する。最後に部屋を見まわした。……よし。

《感知》によると扉の前で待っている住民マーカーがある。その人物が痺れを切らす前に部屋で

よう。

扉を開けると、いつものフル装備……から兜^{かぶと}だけを外したバラムが立っていた。

「待たせたか」

「三日な」

「……」

「冗談だ」

……その割には目が本気な気がしたが。

バラムのあとについて食堂へ向かうと、いつも座る席には湯気^{ゆげ}の立つ食事が用意されていた。あたたかな食事をじっくり味わい終わると、ローザが包みを差し出した。

「これ、お弁当だよ。今回はアンタたちふたり分用意しといたからねえ。気をつけていくんだよ！」

「ああ、戻ったらまたよろしく頼む」

ふたり分の弁当を受け取って挨拶をする。厨房にいる旦那さんにも目礼をして、宿をでた。

「職業ギルドにも寄っていききたいな」

「通り道だ。好きにしろ」

「ああ。……ところで、兜は被らないのか？」

先ほどからずっと気になっていた。明るい屋外でバラムの素顔^{ゆが}を見るのは、なんだか慣れない。

「歪^{ゆが}じまったからな」

「新しいものを用意しなかったのか？」

「とくに必要ってわけじゃない」
「……そうだろうか？」

兜のおかげであの魔物の攻撃から頭を守れたのではないだろうか。……まあ、戦いのプロであるバラムが必要ないというならいいんだが。

いつもどおり裏口からギルドに入った。今は朝だが、カーラはいるだろうか？　これまで見かけた時間帯から、なんとなく夜勤をしているイメージがある。

すると、向こうから見つけて声をかけてくれた。

「トウノさん！　もしかして今日発^たれるんですか？」

「ああ。カーラにはずいぶんお世話になったから、挨拶をとって」

「ふふ、ありがとうございます！　またいつでも立ち寄ってくださいね」

「もちろんだ。ギルは？」

「ギルさんは、今仮眠中で……」

防衛戦が終わっても相変わらず忙しいようだ。ゆっくり休んでほしい。

ギルへの差し入れとして、強壯の飴玉をいくつかカーラに渡しておいた。

「そういうば最近、ユヌとドウトワのあいだにある東の平原で、異人さん同士の襲撃や戦闘が報告されているので気をつけてくださいね。……大剣使いさんがいれば大丈夫とは思いますが」

「そうなのか。忠告ありがとうございます、気をつける」

といつても僕に抵抗する力などに等しいんだが。

それにしても異人同士の襲撃……PKというやつだろうか。PKの目的はさまざまだが、装備やアイテムを略奪するのが一番の目的らしい。

僕の場合、ユニーク装備は僕以外装備できないうえに、ほとんどのプレイヤーにはなんの魅力もない性能だ。そのほかのものも、僕にとっては思い入れがあるが、ほかのプレイヤーから見れば奪うまでもない些^さ末^{まつ}なものばかりだろう。

そんなこんなで笑顔のカーラに見送られて、ギルドをでた。

「終わったか」

「ああ、待たせた」

「こっちだ」

……てつきり手を繋かれるのかと思ったが、バラムはそのまま歩きます。なにを待っているんだ、僕は。

「ああ、そうだった」

「っ！」

丈夫な革の感触が僕の手をおおった。

「馬でいくから、門までな」

「べ、つに……」

うーん……顔に熱が集まってる気がするな、と考えていると、ふと視界に影が差した——と認識

したときには口にやわらかい感触が。

「兜がなきゃ、こういうことができるな」

「といって、バラムはニヤリと笑った。思わず半目になってしまう。

「キザだな……」

そんなことをいうタイプだったのか……？

「はっ、お前からそんな感想を引きだせたなら上々だな」

「なにが……」

「いいから、いくぞ」

そして、少し強く手を引かれて町の出口へ向かった。……のだが、向かっている方向に違和感をおぼえる。

「東門にいかないのか？」

「あんな目立つところからでる必要ねえだろ。ただでさえ異人殺しがでてるつてのに」

なるほど、異人殺し……バラム、もしくは住民なりのプレイヤーキラーの呼び方だろう。

確かに、大通りに面した門からでると、どうあっても目についてしまうから用心するに越したことはないか。バラムだけならともかく、僕は足手まといもいところだし。

どうやら進む方角的に北門に向かっているようだ。人どおりのほとんどない道を抜けると、小ぢんまりとした大きな門の前に二頭の馬が用意されていた。

そのうちの一頭に見覚えがあった。あの栗毛はもしかして……

「ブルル」

「ん、僕のことをおぼえてるのか？」

近づく、馬のほうから鼻先を寄せてくれた。どうやら遺跡調査のときと同じ馬のようだ。

「はは、兄ちゃん、ずいぶんとアンバーに気に入られてんだなあ」

「この馬はアンバーというのか」

「ああ、気立てがよくて賢い牝馬だよ」

もう一頭の手綱を引いてきた男性がそう教えてくれた。

「アンバー、今回はドウトワまでよろしく」

「ヒヒン！」

「ふっ、今回も頼りにしている」

「ブルヒン」

言葉などわかるはずもないが、都合よく快諾と受け取って《騎乗》する。

バラムもすでに《騎乗》しており、馬を引いてきた男性にドウトワへ向けて発つことを伝えていた。

「いくぞ」

「ああ」

またいつかのように、バラムのあとについてフィールドへでる。

前と違うのは、今回は先へ進む道のりだということだ。

街道がまっすぐ東に続いている以外は、野原が広がるのどかな景色だ。防衛戦の影響がほとんどなかった方角だからか、とくに荒れてはいない。

なにもなさすぎて、空を流れる大きな雲の影がよくわかるほどだ。

「降りそうだな」

頭のなかに声が響いた。バラムからの発声せずにできるボイスチャット、『ウイスパー』だ。

「なにがだ？」

「雨だ。そっちにはないのか？」

「いや、あるが……ユヌでは一度も降ったことがなかったから……」

いわれてみると、気象の変化というものを今まで意識していなかった。

「ああ。ユヌから西はなぜかほとんど雨も雪も降らない」

「ふうん、不思議だな」

「そういうもんでも思っつけ」

バラムの言葉に「ああ」とうなずいた。ファンタジーでマジカルな案件、ということか。案外僕たちブレイヤーの出現も「そういうもの」と片付けられているのかもしれないな。

「少し、急ぐぞ」

そういうと、前をいくバラムの馬が駆け足になった。それに合わせてアンバーもスピードをあげる。相変わらず僕はアンバーの邪魔をしないように乗っているだけだ。

やはりバラムの強さゆえか、僕の《感知》範囲に魔物の反応がまったくない。まあ、この辺の魔

物から二、三発でも食らったら僕はたぶん死に戻ってしまうので、遭遇しないに越したことはない。

途中、街道からそれて道のない平原を北寄りに進んでいくようだった。

ふうむ、ユヌの北東寄り……旧倉庫で読んだ『いたずら者ども』について記された本に、該当する記載があったような。唯一いけそうな場所だなど思っていた記憶がある。夜間に平原にいと、突然宙に投げだされて最悪死ぬとかなんとか、理不尽極まりない内容だったと思う。

今は失われているとはいえ、序盤のフィールドにそんな言い伝えがあるなど、なかなか恐ろしい。カーラからそのような忠告はなかったので、おそらく現在は出現しないのだろう。

「……チツ」

思考の海に沈んでいると、前方のバラムから舌打ちがきこえてきた。……さすがに油断しすぎだっただろうか。遺跡調査から日が経っていて、フィールドでの緊張感を忘れてしまっているようだ。バラムの馬が駆け足から歩きくらのスピードになったかと思うと、またウイスパーがあった。

「異人殺しがひそんでる」

「えっ」

……ブレイヤーキラーか。まさか本当に遭遇するとは。

しかし僕の《感知》にはなんのマーカもない。バラムの感知範囲や精度は僕と桁外れにいいだろうから、彼らが僕の《感知》範囲の外にいる、とも考えられるが……

とりあえず《感知》範囲に無差別な《解析》を試してみた。

「……うっ」

遺跡のときほどではないが、大量の情報が視界に流れる。そして、今まで表示されなかったプレイヤーマークが六つほど表示された。付近に罠もいくつか仕掛けてあるようだ。

あらためて《解析》結果を確認すると、プロフィールはバラバラだが、みんな共通して【異人殺し】と【指名手配】の称号を持っており、《隠術》という感知系技能をあざむく技能を習得していた。〔始末してくるから、ここで待ってろ〕

「罠とかあるが、大丈夫か?」

〔問題ない〕

まあ、バラムがそういうなら問題ないのだろうが……【異人殺し】というからには狙いは僕なのだろうし、ステータスにはないプレイヤーならではの連携や罠があるかもしれない。

しかも、プレイヤーに広く認知されているらしいバラムがいると認識して、なお仕掛けてくるのも気にかかる。……よし、こういうのは自重しないほうがいいと防衛戦で学んだばかりだしな。

「バラムから仕掛ける前に、ひとつ僕に試させてくれ。異人殺しは六人で間違いないか?」

「あ? ああ」

よし、漏れはないようだ。いくらなんでもバラムをあざむくほどの《隠術》レベルに達しているプレイヤーは現状存在しないだろう。

僕は《感知》内のプレイヤーマークを強く意識する。そして、《編纂》である言葉を全員に付与した。

目視では確認できていないが、あらためて行つた《解析》結果ではちゃんと発動しているような

ので、おそらく成功しただろう。

「たぶん、異人殺したちを無力化できた……と思う。十分くらいで切れてしまうが」

「……は?」

「一番近くにいる者を確認してみよう」

「おい、説明しろ」

バラムのいらだった声がきこえるが、発動している者を見たほうが早いだろうと、馬を一番近くのプレイヤーキラーのもとに向かわせた。もちろん罠は避けながら。そのあいだ、《感知》範囲の彼らが動く気配はなかった。

すぐ近くにいたプレイヤーキラーが視界に入ると、地面に膝をついてうなだれた状態でなにやらつぶやいている。こちらにはまったく気づいていないようだった。

「一体どうなって……あの遺跡のデカブツに仕掛けた、なにかか?」

「そうだ」

馬から降りて警戒しながらプレイヤーキラーを確認したバラムがいったとおり、彼らに付与したのは、防衛戦の最後、狂った魔物・獣腕のトル型にかけた技と同じものだ。

現実時間のきのう、自分を《解析》したときに《古ルートムンド語》のなかに、ふたつの文章が登録されているのに気づいた。

それは、〈惑う魂に慰めを与えん〉と〈淡き宵の訪い〉だ。

どうやら、それぞれの効果を發揮する『秘技』として登録されたらしい。

前者のほうは対象が指定されているので、狂った魔物にしか効果がない。
しかし、後者は狂った魔物以外にも使えるようなのだ。

《古ルトムンド語》

秘技〈淡き宵の訪い〉 消費AP：5

対象に《編纂》で付与することで発動する。対象によって効果持続時間が変動する。
淡く弱いためわずかなあいだが、宵が訪れる。やすらかな微睡みのなかで望むものを見るこ
とができるだろう。

いつもの婉曲表現だが、今回は付与されたときの状況から比較的わかりやすい。つまり、強制的に眠りに落とし、相手が望む夢を見せる技だ。

プレイヤーキラーの寝言のようなものをきくかぎり、バラムを引きつけて紙防御の僕を倒すのに成功した夢を見ているのだろう。……リアルタイムでどんな夢を見ているのかわかる技を編みだせたら便利だろうか？

ちなみに発動には秘技と《編纂》分のAPを消費するので、結構重たい。

バラムには秘技の詳細とプレイヤーキラーの《解析》結果を紙で出力したものを見せて、口でも説明する。すると顔を手でおおって天を仰ぎ、おまけにとつともなく大きいため息をついた。

「……お前って奴は……とんでもない技だぞ、これ」

「そ、そうだろうか？」

まあ、《感知》マーカーから付与できるのは、我ながらトンデモポイントだと思う。

「これはふつうの状態異常じゃねえから、《状態異常耐性》を持つている俺でも簡単にかかる」「えっ」

「存在を《感知》されるだけで付与されるし、技にハマった自覚も持てない」

……それは確かに、とんでもないかもしれない。プレイヤーキラーの《解析》結果をあらためて確認すると、確かにこの技は『特殊効果』の欄に記載されていたので、ふつうの状態異常ではない。

「あとこれ、時間経過以外の解除方法あんのか？」

「……《解析》結果を《編纂》できれば……？」

「それができる奴がどれくらいいるってんだ？」

僕は黙って目をそらした。変な汗がでそうだ。

不意に、両頬を大きな手でガシッと掴まれて、強く揉みしだかれた。痛い。

「絶対に、この能力を俺以外に悟らせるんじゃねえぞ。知られたらどうなるか、想像できるな？」

「わはっは……」

頬を掴まれたままコクコクとうなずいた。

この秘技はかなり凶悪で、知られたら危険人物認定待ったなしだ。

だが僕自体はとても弱い。物量攻めでAP切れさせられるなり、反応できない攻撃で気絶させられるなりして捕まってしまえばもうなにもできない。